

意見異見

た次第です。

戦前戦中にはまた、明治・大正時代に設立された県営の測候所が一斉に国有化され、中央気象台の全国的な体制が整いました。そして災害の軽減に加え、農業を中心とした産業のため、中央気象台に「産業気象課」が設立されて生物季節観測の前身を含む農業気象業務が始まりました。その後、農林省との間で「農業気象協議会」が設けられ、民間レベルでは「農業気象学会」も設立。当時、官署の裁量でバラバラに行なわれていた「生物季節観測」が、全国で統一されたのが53年というわけです。

気象庁は今回の見直しの理由として、対象生物を観測し続けるのが困難になったとしていますが、実際には、公務員の定員削減の影響も大きいと思います。これまで全国の各地方気象台で行なっていた予報・観測業務を全国11カ所の「地方予報中枢」に集約を進めているのもその一例です。近年の技術の進展を踏まえた体制の見直しはやむを得ないとしても、今回の見直しで、これまでのデータの継続性が失われるとともに、すでに進行中の地球温暖化による動植物の生態変化の監視が手薄となるのは、農業関係者などにとっても大きな痛手に違いありません。

そこで、筆者の経験も含めて、生物観測業務の新しい形を提案したいと思います。

まず、観測は気象庁のみならず、農家や林業、漁業関係者、自然保護や動物愛護団体、山岳関係者のボランティアを募り行なう。観測対象域や内容が飛躍的に広がり、データの密度も豊かになるはず。例えば観測対象として、生物以外にも、山岳の雪が春季に融け始める際に現われる「雪形」などを加えてもいいかもしれません。

気象庁を中心に農水省や環境省が連携し、関係者で組織を立ち上げ、新たに観測・通報フォーマットを作成。スマホでの撮影やメール機能を最大限に活用し、観測データのアーカイブ、利用者へのデータ提供体制を構築し、維持する。組織の運営に要する経費は国による助成のほか、クラウドファンディングなども考えられるかもしれま

せん。現在のIT技術を最大限に活用し、民間の、とくに農家の皆さんの協力を得て、新たな生物季節観測を始めよう、という提案です。

と、ここまで原稿をまとめていたところ、気象庁から新たに発表がありました(12月25日)。今年1月より、生物観測に取り組む市民などを対象に、観測手法等のノウハウを教える講習を開催し、そのマニュアルを提供するというのです。

案内では、生態環境の変化や気候変動が生態系に与える影響の調査結果が、多方面にわたり有用な基礎資料であることを認めたくえで、気象庁でこれまで培ってきた生物の観測手法等のノウハウを民間に提供し、環境省とも連携して、市民参加による四季の生物観察を推進するための情報交換ネットワーク構築に向けて検討を進めていくとしています。



農業や環境保全などに携わる関係者からは、観測の継続を望む声があがっていました。新たな気象庁の取り組みに、一人でも多くの農家が参加することを願っています。

BIOREMEDIATION LABORATORY HIROSHO, Co.Ltd

作物の胃腸は土壌です
土壌に乳酸菌のサプリメント

乳酸菌・酵母含有複合発酵菌資材

ラクトビロックス®

当社微生物検査ラボ

株式会社 廣商
〒861-1103
熊本県合志市野々島3146-1
TEL096-348-2025
FAX096-242-5224
※詳しくは Web で!

ラクトビロックス 検索

◆ 古川さんの連載「なるほど観天望気 雲を見る、空を読む」を掲載した単行本「農家が教える 天気を読む知恵とワザ」(農文協編)が好評発売中です(税込1760円)。